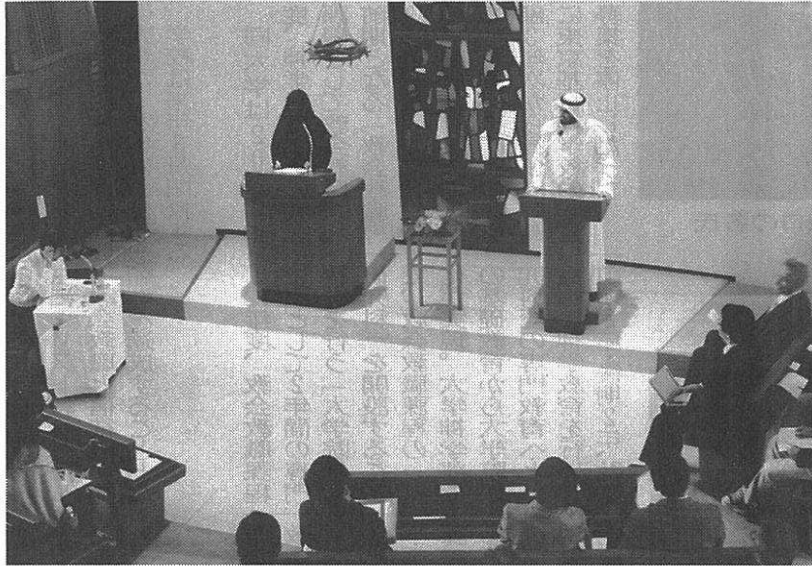


wide kirishin

同志社大学一神教学際研究センター講演会「現代世界におけるムスリム女性」 サウジアラビアのサーラ・アール・サ우드王女語る

同志社大学一神教学際研究センター(CISMOR、小原克博センター長)は、10月22日、公開講演会「現代世界におけるムスリム女性」を同大今出川キャンパス神学館礼拝堂(京都市上京区)で開催した。目だけ見えるニカブを着用したサウジアラビアのサーラ・アール・サ우드王女が講師として登壇した=写真。

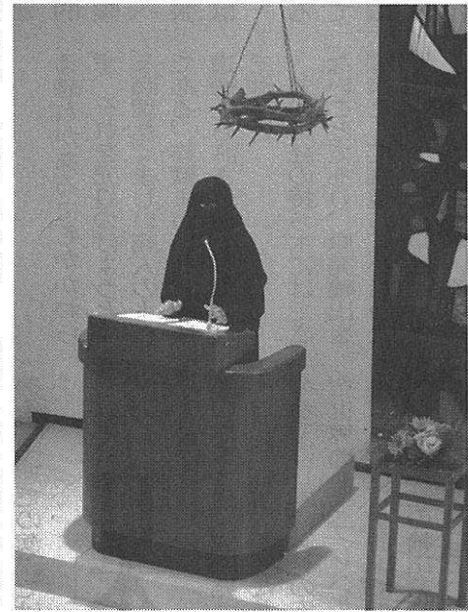
サーラ王女は、アブドゥル＝ムスフィン・ブン・ジャラウィー王子イスラーム研究調査センター総長を務める。夫であるミスフェル・アルカハターニー教授と来日した。



女性の労働権も一般に認められている。どうしても就けない職は「国家の首長」、とサーラ王女

ムスリム女性に関する問題について報道されることがあるが、日本では断片的な取り扱いにとどまっている。サーラ王女は昨年同大を訪問。CISMORは、王女が総長を務めている研究所との協力関係構築の一環として、今回あらためて招いた。

サーラ王女は、イスラームにおける人権、自由、平等、公正の実現などについて説明し、女性が有する諸権利を述べ、「現代ムスリム女性がおかれている状況は必ずしも良いとはいえない」と分析。そしてそれがイスラームに還元されるものであるのか、現代社



会に還元されるべきであるのか問題になる、と話した。さらに「イスラームが捉えている女性の権利を理解してもらえたら、どちらに分があるかは理解してもらえらると思う」とした。

かつて、思想、政治、経済などで後進性の時代を経験したイスラーム社会。多くはヨーロッパの植民地とされた。イスラームを尊重する女性の価値、権利、地位などが書物にだけ記されて実際に適用さ

れないものになってしまったことから、20世紀以後、女性の現状についてさまざまな主張がなされてきた。

そこには女性教育が発展したことや、イスラーム社会が他の社会に向けて開かれていったことが理由にある。かつては存在しなかったような問題が新たに発生し、その最重要のものが「女性の権利」とサーラ王女。「婚姻」「女性に対する男性の管理権」「育児の権利」などが議論されるよ

若い世代は「宗教」「文明」軽視

アイデンティティの危機

うになった。

湾岸諸国やサウジアラビアなどの女性教育は進んでいるが、多くのイスラーム諸国では識字率が未だ低い。女性のエリート養成が限られているのも事実。そうしたなかで、イスラームの固有性をどう保持するかということも問題となっているという。

サーラ王女は、「国際的圧力の影響で女性のアイデンティティが明らかになくなってきた」と主張。ムスリム女性にとってのアイデンティティは「宗教」「文明」などさまざまだが、現代は若い世代を中心にそれらを軽視する傾向が見られ、「自分たちのものではない文化を着ようとする」と危機感を露にした。

そうした状況を先導したのは報道であり、イスラーム的な価値に対して疑念を負わせてしまったこと、さらには他の文化が顕現されるようになり、「外国文化によって、女性が本来あるべき姿でないものに変化」しているとの考えを示した。

物質的な側面が強調される代わりに精神的な側面が軽視されることは、現代のムスリム女性にとって最も大きな問題であり、「これらの課題に対して、どういう努力がなされてきたのか、日本の人々にお尋ねしたい」と問いかけた。

小原センター長は、サーラ王女の講演を受け、女性のあり方については宗教が束縛の力にも解放の力にもなりうる」と解説し、「両方のポテンシャルをもつ宗教をどう見直していくのかが普遍的に問われている」と述べた。

中東の民主化への動きが注目されている昨今、イスラームの力が人々を解放し社会を民主化へと向かわせていく力になるのか、急進派が自由を束縛するような形で台頭してくるのか、不安定さは残るが「個人的な見解では、人々をより解放していく力として役立つことを期待している」と小原センター長。

来場者からの質問は多岐にわたった。とくにニカブを着用していることについて「その格好ですつといるのは不公平ではないか」との突っ込んだ問いに対し、「どこに行ってもこの質問を受ける」と前置きし、誰かに言われていてい

るのではなく、「自らの意思で目以外を覆っている」と、切り返した。

「男女の平等という視点で、顔を覆うことは無関係だ。私は高水準の教育を受け、地位ある職業にも就けた。(顔を覆うことには)色々と言われるが、私は自分がしたくてやっている。身体が覆われていても理性までは覆われていないものだ」